彼女の言葉の裏側に

風月爽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼女の言葉の裏側に

【Ｎコード】
Ｎ４１６０Ｃ

【作者名】
風月荧

【あらすじ】
死神と現実主義者の短いやり取り。

（前書き）

掲載中の短編小説「彼女の言葉は真実か」続編です。宜しければ先に前編ご一読下さい。

「信じなくていいのよ」
彼女が冷めた声で言った。
「分かってる。信じてない」
俺はそう答える。信じてない。わざわざ言い切ったことが滑稽に思えた。

―白状すれば実は、信じ始めている。

彼女は『死神』だそうだ。ある日突然目の前に現れた彼女は、第一声で俺の名前を呼び、二言目で自分の素性を明かした。死神。本人がそう言っているだけで、はっきり言って俺がそれを信じる根拠は冷静に考えれば全くない。そう例え、―例え、俺が彼女をかなり好意的に思っているにしても、だ。

俺は、この訳の分からない女に好意を持っている。この屈折したどこか投げやりな女に。

彼女が呆れたように溜め息を吐き出す。
「信じてないって言葉がすごく白々しく聞こえるのよね。まるで自分に言い聞かせてるみたいよ、それ」
―その通りだ。あまりにあっさり心中を見透かされたのが情けなかった。
彼女はちらりと俺を一瞥して、次の瞬間には俺から一切の興味を失ったように何もない宙をぼんやりと眺めた。

死神。

俺は大体においてその種のロマンチシズムを嫌悪する人間だ。だから『はいそうですか』と信じるのは、―仮に正直なところ信じていたとしても―とにかくプライドが許さない。俺は現実主義者だ。だが。

「信じているにしろ疑っているにしろどのみち―…」

彼女はそれ以上続けなかった。凛とした佇まいを心持ち正す気配だけが漂う。

とても美しく、反面で儚かった。

「どのみち？ああ、俺を殺しに来た、ってか」

軽く返した先で彼女の漆黒の瞳がすっと細められた。そして僅かに口元が引き結ばれる。彼女は何も言わなかった。言い訳はしない。そんなところか。彼女は微動だにせずじっと遠くを見つめていた。違う世界に住んでいる。理論を並べられるより、よほど分かりやすかった。きっと彼女は言葉の通り『死神』なのだろう。

「逃げても、いいのよ」

―逃げてくれ。

瞳は逸れていた。理由は分からなかった。それでもなぜか、俺にはそう聞こえた。

（後書き）

続編掲載中です。↓ＮｅＸＴ「彼女の彼女の彼女の、」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4160c/

彼女の言葉の裏側に

2011年1月27日08時23分発行